

---

# 約束

ayu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

約束

### 【Nコード】

N0849R

### 【作者名】

ayu

### 【あらすじ】

『約束』という言葉。それを嫌いだという、彼女の言葉。病床の彼女と僕の短いお話。

(前書き)

楽しんで頂ければ幸いです。

鬱々としたお話ですので、苦手な方はご注意ください。

今度の日曜日には一緒にケーキを食べに行こうよ。

その次は遊園地に水族館。

クリスマスや誕生日には、ちよつとだけ高級なレストランに行こうね。

僕たちはいつも、たくさんの約束をした。

約束だよと指をからめ、見つめ合い、いつも二人で笑いあっていた。

十

「嘘なんか吐かないよ。口を閉ざすことはあってもね」

ある時から、君はそう言って笑うようになった。

そして、『約束』と言う言葉が何よりも嫌いだと、その表情のまま呟くようになった。

彼女は、とても美しい人だった。柔らかな絹の黒髪に、オニキスのような黒い瞳。優しい声は静かで穏やかで、すつと空気に馴染む鈴の音のように柔らかく軽やかな彼女の声は、何よりも心地良かった。

君はいつも、微笑んでいたね。

白いシャツに、白い壁。まっ白な部屋に押し込められて、腕に何本もの針を刺されていたのに。辛そうな顔なんか全然しないで、君はいつでも、僕に微笑みかけてくれた。

「あたしね、もうすぐ死んじゃうんだって」

そう言った時だつて、君は扇のような睫毛を二、三度揺らしただけで、悲しい顔なんか少しも見せなかった。

君が教えてくれたその病名は初めて聞くものだった。

もう治らないんだつて、などと言いながら、君はまるでコメディ映画でも見ているようにころころと笑っていた。

僕は、泣きたかつたのに。

どうしてそうやって笑っていられるのと、泣いて喚いて叫びたかつた。だけど笑っている君の横で泣くことなんか出来る訳もなく、僕は以前よりも確実に小さくなつた君を抱きしめて、こつ言つた。

「僕は、君と一緒に居たいんだ」

何年も前から、指輪を用意していた。だけど君は、元気になつたらね、と言つて受け取つてはくれなかつた。結婚してすぐに死んじやつたら貴方が可哀そうだもの、と言つて。手に取ることすらせず、指輪を僕に押し返した。決して、受取ろうとはしなかつた。

医者に聞いた話によると、その病気はかなりの痛みを伴うもので、彼女のように静かで穏やかに微笑んでいられる人というはまずいんじゃない。症例こそ少ないが、突き刺さるような痛みに涙を流し、呻き、嘔吐し、衰弱し、息絶えていくケースがほとんどと言う。

一体どれだけの痛みを呑み込んで、どれだけの苦しみを呑み込んで、彼女は生きているのだろう。そんなこと僕には想像することもできなくて、何も出来なくて、ただ無力な自分を嘆き、無言のまま彼女を見つめていた。

ある時、僕は彼女に言った。

「嘘でも良い。僕と共に生きると言つてくれ。約束して、お願いだから……」

「ごめんね、と君は言つた。

どこまでも優しく、静かに、穏やかに。慈愛に満ちた、清らかな微笑みを湛えながら。

『約束』

君は、この言葉が嫌いだと言った。

こんなにも現実味のない言葉は他にないから。何よりも嫌いな言葉だと、彼女は笑顔のままそう言った。

そして、とても饒舌に語るのだ。

「『約束』って言うのはね、自分を安心させる為にするものだよ。自分の世界は今と過去だけで構成されている訳じゃない、自分たちにはこれからの人生が、続く未来があるんだ、…ってね。言葉によって未来を確定させることで、その未来が確実にそこに存在するものなんだって思い込むために。皆、自分の未来は誰かと共有できて、確実に楽しいものになるって思いたいんだよ。確定された、覆る事のない未来がそこにあるって。そうしていないと、不安になるから。…だから、人はいつも誰かと『約束』をするの。曖昧な言葉で不確定な約束を結んで、それで安心した気になっているの。だから、『約束』は、嫌い。曖昧なものに、意味なんてないわ」

彼女にとって、『約束』とはそういうものだった。

不確定な未来を確定させたいがために行う、空虚で愚かな行為。

未来がないと宣告された彼女にとって、『約束』とはそういうものでしかなかった。

この小さな病室みたいに真っ白で、空虚で、意味の成さないものだった。

「そもそも、未来を確定させようとするその行為自体が間違っているわ」

そう言って笑う君は、この真っ白な部屋に溶けてしまいそうなく

らい白くて、澄んでいて、細い体は触れば折れてしまいそうで、痛々しかった。だけど、その姿はまるで妖精のようで、とても綺麗で、僕は見るたびに泣きそうになっていた。

ねえどうか、楽になって。

僕は一つ、『約束』をした。

『必ず、会いに行くからね』

そう言っつて、僕は眠っている彼女の腕に注射針を刺した。ゆるりと、眠るように逝けるように。

彼女の腕にささる全ての針を抜き、体を拭き、長い髪を梳かし、乾燥した唇に水を含ませ、口紅を塗った。そして、白くて細い指に銀色の指輪をはめた。やせ細った彼女の指には、その指輪は少し大きかった。

しばらくして、彼女の心音が止まった。ピー…、という無機質な機械音が病室に響き、彼女の死を僕に知らせる。

約束は、守らなければいけないよね。

君は曖昧なものだと言っつて嫌うけれど、僕はちゃんと、確かなものにすることが出来るんだよ。絶対的で、不確定要素なんてひとつもない、確かな約束を君にあげるね。

僕は彼女の額に、頬に、唇に、首筋に、銀色の指輪に、ひとつずつ口付けをし、自分の腹にナイフを突き立てた。痛みで意識が飛びそうになったけれど、僕は何度も何度もナイフを突き立てた。

彼女の痛みを、苦しみを追うように。痛みや苦しみを味わうように。

僕は繰り返し、自分の腹にナイフを突き刺した。

まっ白な病室は紅く、血の匂いに染まる。血の臭いが濃くなる。

だんだんと視界がぼやけ、滲んでいく。

薄れていく意思気の中で、僕は静かに微笑んだ。

僕はね、君と一緒に居たかったんだ。

了



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0849r/>

---

約束

2011年5月31日12時14分発行